

学力向上への総合的な取り組み

京都市立御所南小学校 西 孝一郎

はじめに

御所南小学校は、平成7年に統合により開校して、今年9年目を迎えた学校である。子どもたちの数が減ったことをきっかけに、地域の方がよりよい教育を求めて、5校統合という画期的な統合に踏みきられた。統合したことにより、児童数は逆に増加し始め、現在では700人を超えている。

新しい施設をつくるにあたって、オープンな形の施設づくりが進められた。教室には扉がなく、学年共有のオープンスペースがあり、学年全体での活動をしやすくなっている。プールや体育館は、外部の階段を使っても出入りできるようになっており、地域開放型の施設となっている。

平成9年度から11年度までは、文部省指定の研究開発学校として、カリキュラムの開発に取り組んできた。カリキュラム開発の柱となったのが、総合的な学習である。以後、12年度から13年度まで、研究開発の継続指定となった。また、平成13年度には生活科の全国大会、平成14年度には社会科の全国大会の会場校となった。

平成14年度から3年間の予定で、文部科学省の「新しいタイプの学校運営の在り方に関する実践研究」指定を受け、いわゆるコミュニティ・スクールの在り方を探っている。

ここでは、その間の学力向上への総合的な取り組みについて報告したい。学力向上は、一人の教員の力だけでできるものではなく、1年だけでできるものでもない。一人の教員の力を、すべての教員に、そして地域・保護者とも連携して、継続的に行える体制をつくっていくことが必要であると考えている。



I 調査結果から

御所南小学校では、子どもたちにどのような力がついてきているのかを評価するために、平成14年度に、5年生を対象として「学力向上のための基本調査」を実施した。

その結果は、「教科学力」や「生きる力」において、ほぼ予想通りのものであったが、いくつかの新たな発見をすることができた。

「学びの基礎力」については、平均的な数値を示した。「学びの基礎力」は大切だが、「学びの基礎力」をつけなければ「教科学力」や「生きる力」が育たないということではなく、「教科学力」や「生きる力」を育てることを通して、「学びの基礎力」をつけていっているように考えられる。

① 学びの基礎力

全体平均を上回った項目としては、「他者との

支え合い」「学習定着のための方略」「自宅学習習慣」「学習のけじめ」「学習環境の整備」などがあげられる。

「他者との支え合い」については、総合的な学習の中で、さまざまな方とふれあいながら学習を進めてきた取り組みが、効果を表していると考えられる。

「学習定着の方略」「自宅学習習慣」は、基礎的な内容を身につけるための家庭学習を、計画的に実施していることの成果だと考えられる。

「学習のけじめ」「学習環境の整備」は、総合的な学習と教科の学習を両輪として取り組みを進めてきた成果だと考えられる。

一方、平均をやや下回った項目としては、「直接体験」「メディア体験」「基本的生活習慣」などがあげられる。

「直接体験」の少なさは、学校の立地条件によるところが大きい。本校は市内の中心部にあり、京都御苑が近いものの、それほど自然が豊かというわけではないからである。

「メディア体験」の少なさは、学校の通信環境が、まだそれほど整っていないためだと考えられるが、これは現在かなり整備されてきている。

「基本的生活習慣」については、「朝、自分で起きることができる」という項目で低くなっており、誰かに起こしてもらっているようすがうかがえた。

全体的に見ると、平均的な数値とそれほど差がなく、ほぼ平均的な力を有していると言っていい。「学びの基礎力」と「教科学力」との間に相関関係はあることは、調査結果に示されているが、本校の結果だけから考えると、「学びの基礎力」をつけなければ「教科学力」や「生きる力」が育たないというわけではなさそうである。

むしろ、「教科学力」や「生きる力」を育てることによって、「学びの基礎力」をつけていっているように考えられる。

② 生きる力

平均を上回った項目としては、「問題解決力」

「社会的実践力」などがあげられる。この2項目は、本校の考える「学ぶ力」に対応するものである。本校では、「学ぶ力」を「(問題)発見力」「(課題)設定力」「(課題)解決力」「活用力」の集まったものだと考えている。したがって、これらの項目の数値が高いということは、つけようとしてきた「学ぶ力」がついてきている結果だと考えられる。

「学ぶ力」をどのようにしてつけようとしてきたのかは、取り組みのところで述べるが、意図的につけようとしないとつきにくい力であるということは感じている。

③ 教科学力

今回の調査は、国語と算数に限られたものだったが、すべての項目で平均を上回っていた。国語では、基礎的な部分で、それほど差が認められなかったが、「書く力」「説明文」「小説文」などの項目で大きな差があった。これは、意外なことだった。

後に述べるように、本校では、「かがやきタイム」などの取り組みで、学習の基礎となる力をつけるようにしているが、そこでは「書く力」「説明文」は扱っていないからである。それでは、これらの力が、どこでついてきたのかというと、総合的な学習の中で、体験から考えて書くということを繰り返してきたからではないかと考えられるのである。

算数でも同じように、基礎的な部分ではそれほど差がなかったが、「応用・発展」「表現・処理」「数と式」「量と測定」などで大きな差があった。これも、意外なことである。

本校では、毎日の家庭学習を計画的に実施し、課題の作成・点検を確実にこなしているが、それは基礎的な部分に重点をおいたものである。それでは、これらの力はどのようにしてついてきたのであろうか。これも、総合的な学習の中の思考練習が影響しているように見える。

Ⅱ 自己教育力を身につけた子ども

御所南小学校は、研究開発学校の時から、「生涯学習につながる自己教育力を身につけた子どもの育成」を研究主題として取り組んできた。生涯にわたって学び続けるために、自分で課題を見つけ、自分で考え解決し、学びを生かしていくような子ども、すなわち自己教育力を身につけた子どもを育てたいと考えてきた。

自己教育力を身につけた子ども、自ら学ぶ子どもを育てていくためには、どのような力をつけていけばいいのか。それを「学ぶ力」と「基礎・基本となる力」の2つに分けている。この2つの力を合わせて、「確かな力」だと考えている。

① 学ぶ力

まず「学ぶ力」をつけたいと考えている。「学ぶ力」というのは、

- ・発見力……身の回りの人・自然・社会に関心をもち、問題を発見する力
- ・設定力……発見した問題から意味ある自分の課題を設定する力
- ・解決力……自分の課題に向かってさまざまな方法で追究し、課題を解決する力
- ・活用力……学んだことを活用したり、地域や社会に生かしたりする力

の4つである。

この4つの力は、自己教育力につながる力であり、自分で課題を見つけ解決していくのに必要な力である。「学ぶ力」は、各教科等で身につけるものだが、特に総合的な学習で、問題発見・解決的な学習を行うことを通してつけていこうとした。

「学ぶ力」を身につけた子どもは、小学校を卒業した後も、自分で課題を設定して学び続けていく。そのためにも、総合的な学習で、単なる自由研究を行うのではなく、自由研究できる力をつけていきたいと考えている。

② 基礎・基本となる力

(1) 学習内容の基礎・基本

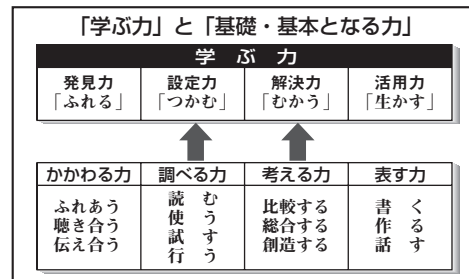
学習内容の基礎・基本は、指導要領の内容そ

のものである。その中でも、教科の学習をしていく上で、どうしても「知って」おきたい内容については「内容の基礎」とし、徹底して教えることも必要であると考えている。

- ・学習内容の基礎……
基礎的な事項を「知る」 具体的知識
- ・学習内容の基本……
基本的な概念が「わかる」 概念的知識

また、この基礎をもとにして「わかっていく」基本的な概念については「内容の基本」とし、教科の目標を明確にすることによって、確実に身につけさせていきたいと考えている。

基礎と基本は明確に分けられるものではないが、教えるべきことは教え、自ら身につけることについては支援していく姿勢をはっきりさせるために、ある程度分けて考えている。



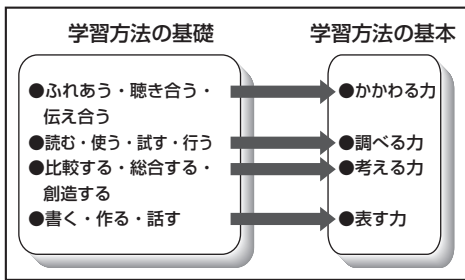
(2) 学習方法の基礎・基本

学習方法の基礎・基本も学習指導要領に示されている。この方法を身につけていくまでには、

次のようなステップがあると考えている。

- ・学習方法の基礎・・・基礎的な技能を「試す」
- ・学習方法の基本・・・基礎的な技能が「できる」

学習指導要領では、教科ごとに、あるいは総合的な学習でも、学習方法が示されている。これを次のようなまとめ方に見てみた。



「かかわる力」という基本は、「ふれあう」「聴き合う」「伝え合う」という基礎に支えられたものである。「調べる力」という基本は、「読む」「使う」「試す」「行う」という基礎に支えられている。同じように、「考える力」という基本は、「比較する」「総合する」「創造する」という基礎に支えられ、「表す力」という基本は、「書く」「作る」「話す」という基礎に支えられている。

このような基礎・基本となる力は、教科と総合的な学習に共通するものであり、どちらでもつけていきたい力である。

Ⅲ 「学ぶ力」をつけるために

「学ぶ力」は、すべての教科・道徳・特別活動を通してつけていくものだが、教科の力を応用・発展させる大きな力として、特に総合的な学習でつけようとしている。

総合的な学習を構成するにあたっては、問題発見・解決的な学習過程をとり、子どもたちが学習することを通して、学ぶスタイルが身につけられるようにした。

問題発見・解決的な学習過程をとるために、単元の構想を大切にしている。また、単元の中心にあたる部分に「中心課題」を設定し、学年全体の課題に向かって、自分の課題を解決していくようにしている。この課題設定までの時間を十分にとることにより、子どもの興味・関心を深め、追究意欲が高まるようにしている。

① 発見力(問題に気づく力)をつける

(1) 問題を発見できる体験や観察

学習の初めの場面に、問題を発見できるような体験や観察を入れている。その一つは、自分の予想とずれるような体験や観察である。もう一つは、感動するような体験や観察である。このような体験から生まれる疑問や感動を大切に、問題を発見できるようにしている。

(2) キーワードでまとめる

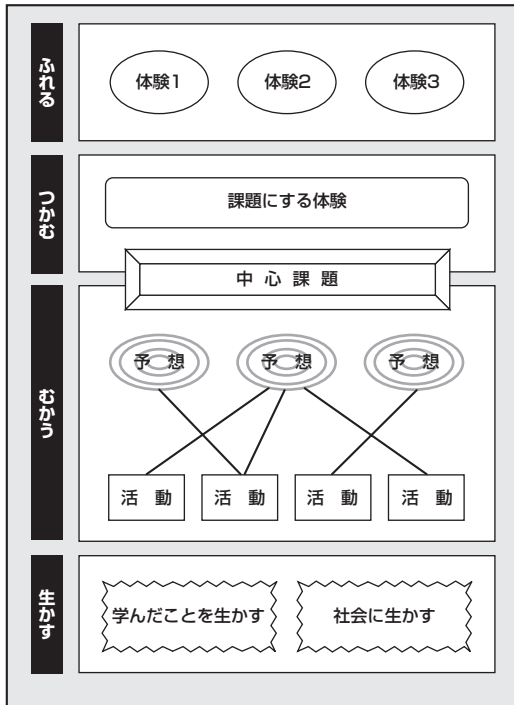
体験したり観察したりして感じたことは、キ

ーワードでまとめるようにしている。体験や観察の後の交流で、キーワードとなる感想を出し合い、それをもとに自分の感想をまとめるようにすると、自然や社会を見る目が育ち、問題を発見する力がついてくる。

(3) 体験や観察を構成する

体験や観察を、単元のねらいに沿って意図的に構成するようにしている。子どもたちは、最初の体験に影響を受け、その中で単元を通しての活動方法なども学ぶことになる。最初の体験の後に、いくつかの体験を重ねることにより、

比較したり総合したりする目が育っていく。



② 設定力(課題を設定する力)をつける

(1) 問題を自分の課題にする体験

これまでに気づいてきた問題を、自分が追究していく課題にするためには、自分でも少しやってみるような体験が有効である。

問題を見つける段階とは少し違った体験を入れて、自分とのかかわりで課題を設定できるようにしている。

(2) 課題を設定する

これまでの体験や観察をもとに、自分の課題を設定する。このとき、「自分の問題をつくっていこう」というように働きかけていきたい。

実際に課題設定ができにくい子どもには、どのようにしたら問題がつくりやすいのかという指導も必要である。また、すぐに終わってしまう課題を選択しないように、問題の大きさなどにも着目できるようにしている。

(3) 一人一人の課題を「中心課題」に

一人一人の課題ができて、すぐに課題追究に入ると、全体で交流するときには接点のない交流になってしまう。そこで、一人一人の課題をつなぎ、全体を含みこむような大きな課題(中心課題)を設定するようにしている。

「中心課題」にまとめていくには、これまでの体験や観察の中で出てきたキーワードが手がかりになる。

(4) 中心課題に対する自分の考えをもつ

中心課題ができたなら、もう一度自分の課題をふりかえり、全体の課題に対する考えを出すようにする。

考えがはっきりもてたら、追究していく学習計画を立てるようにしている。学習計画を立てるとき、場合によってはサンプルのようなものも提示して、活動の見通しが立ちやすいようにしている。

③ 解決力(課題を解決する力)をつける

(1) ねらいのための活動になるように

課題に対して自分の考えをもった子どもは、追究を始める。ここでは、ねらいのために活動をおくようにしている。活動自体がねらいになると、活動さえできれば授業が成立したようになってしまう。

ねらいのための活動には、さまざまなものがあり、それを組み合わせながら、ねらいに迫っていくようにしている。

(2) 体験を通して調べる

追究する活動として、本や資料で調べるということも多い。インターネットで手に入れた資料をそのまま使ってしまうということもある。

子どもたちには、本や資料を通して追究するだけでなく、実際に見てみる、実際にやってみるということによっても追究できるのだ、ということ

がわかるようにしている。実際にやってみることによって追究すると、発表も説得力をもつものになる。

(3) 交流を大切にする

調べている途中で、いろいろなパターンの交流を行っている。互いの共通点を見つける交流や、違いを認める交流、同じテーマどうしの交流、違うテーマがクロスする交流など、さまざまな交流がある。

日常的に意見を交流することによって、自分の考えを確かなものにしていきたいと考えている。

④ 活用力(学んだことを生かす力)をつける

(1) 学んだことを生かす

学んできたことを生かして、自分でどんなことができるのかを考えるようにしている。学んだことをそのまま発表して終わるのではなく、それを活用して新しいことや深まったことができなにか考えるのである。

学んだことを生かして、活動を楽しむという

のも、学んだことを生かすことになる。また、学んだ視点を違う学習の視点として生かすというのも、学んだことを生かすことになる。

(2) 社会に生かす

学んだことを社会に生かす方法にも、社会に対して発表することや、知ってもらふこと、アピールすることなど、さまざまなものがある。これらをまとめて、社会に生かしている、と考えている。

また、地域の人々を対象に生かしていくだけでなく、地域に来られる人も対象にすることができる。

(3) 組み合わせて活用する

学年や単元によっては、学んだことを生かすだけのこともある。また、社会に生かすだけのこともある。しかし、場合によっては、学んだことを生かして、さらに社会に生かすこともできる。ねらいに合わせて、これらの活動を組み合わせるようにしている。

Ⅳ 「基礎・基本となる力」をつけるために

基礎・基本となる力をつけていくために、教員が互いに連携しながら指導していくようにしている。

TT教員は、学習の基盤となる基礎的な力をつけることを、主なねらいとして取り組む。その力を生かして、担任の教員が基本的な力をつけていくようにしている。

このように、ある程度の役割を決めて、指導を進めていくときも、互いに連絡・連携・協働することが大切である。

基礎・基本を身につけていくためには、教員の連携のように、枠組みを見直すことが重要になってくる。時間の枠組み、連携の枠組み、内容の枠組みなど、基礎・基本を身につけるといふ視点から見直してみ、総合的に取り組みを進めていけるようにしている。

① 朝の「かがやきタイム」の活用

毎朝の15分間は、「かがやきタイム」という時間をとっている。ここでは、詩の朗読や読書、

計算、身体表現活動などを行っている。この活動は、学習の基礎となるべきものなので、主にTT教員が計画を立てて実施している。

〈かがやきタイムの年間計画〉

4 月	音読・読書	10 月	読書
5 月	算数（計算） 音読・表現	11 月	音読・表現
6 月	音読・表現 読書 算数（計算）	12 月	表現
7 月	算数（計算） 表現運動	1 月	表現運動
8 月		2 月	算数（計算） 音読・表現
9 月	算数（計算）	3 月	音読・表現 読書

② 毎日の家庭学習課題の作成とチェック

学習の基礎になる部分を育てるために、T T 教員が毎日の家庭学習課題を作成し、採点・チェックを行っている。内容については、算数にしぼって重点的に取り組んでいる。

子どもたちは毎日、T T 教員が作成したプリントを家庭で行い、翌日提出する。T T 教員は、その日のうちに採点・チェックして子どもに返却する。間違いがある場合も、その日のうちに直しきることを目標に行っている。

1 年間やり終えた子どもたちは、授業の理解が深まったと考えられる。これは、算数テストのクラス平均が 90 点を超えるクラスがほとんどだったということからもうかがえる。

また、1 年間に 170 枚を超えるプリントという目に見える形で表れたことにより、算数に対する自信をもつこともできたようである。

③ 補充学習

学習の基礎になる部分については、1～3 年生までが週に 1 時間、補充学習を行っている。国語と算数を中心に補充の時間をとっている。

それぞれ、「すいすいタイム」「わくわく算数」「わくわく国語」などの名称をつけて、子どもたちにも、活動時間として意識できるようにしている。

補充時間はクラスごとに行い、T T 教員と担任が連携して、複数指導ができる体制をとっている。

④ 少人数指導

基本的な力をつけるために、T T 教員と担任とが連携して、少人数指導を行う単元がある。算数を中心に、学級を 2 つに分けて指導を行うようにしている。この時のグループは、均等に分けたものであり、特に習熟度別にはしていない。

少人数の学習形態をとることで、子どもたちは落ち着いた環境で活動に取り組むことができ、じっくりと考えて課題に向かう場面が多く見られるようになってきた。

授業後に行ったアンケートでも、多くの子どもたちが、発表や質問がしやすかったことをあげ、授業が楽しかったと書いている。

ただ、指導人数の問題もあり、それほど多くの時間を少人数指導とすることができないのが現状である。

⑤ 一部教科担任制

中学年と高学年の一部で、教科担任制をとっている。これには二つのねらいがある。一つは、小中連携を目指して、中学校へのスムーズな移行をはかるということである。もう一つは、授業の準備をていねいに行い、子どもが興味をもって学習に取り組めるようにするということである。

教科は、中学年で理科、高学年で理科・音楽・図工となっている。特に理科を取り上げているのは、実験や観察の準備など、全体を見通して計画的に行わなければならない教科であり、実験のと

きには複数指導体制が生きると考えたからである。
 高学年の理科では次のように指導を行っている。

TT教員が2学年分の理科の計画を立て、プリントや実験の準備を行う
 ↓
 担任とTT教員の2人体制で授業を行う

このような一部教科担任制は、中学校の教科担任制と小学校の学級担任制のよいところを取り入れたものである。これから、さらに望ましい姿を探っていきたい。

⑥ 教員研修プロジェクト

本校では、研究テーマに沿って、全学年(組)

で研究授業が行われている。これによって、研究は継続・発展されていっているが、教科にしばっての研修や、あるテーマについての研修はもちにくい。

そこで、月に一度の研修プロジェクトを実施している。ここでは、コンピュータや英語などのテーマ研修、総合的な学習、各教科の授業づくり研修などを行っている。

研修プロジェクトの講師は、本校教員であり、お互いに自分の得意とする分野を公開することにより、専門性を高めていこうとしている。これは、研修を受ける方のプラスになるばかりではなく、研修講師を務める側にとっても意味ある研修となっている。

V 子どもの学びを支える地域コミュニティの創造

御所南小学校は、平成14年度から「新しいタイプの学校運営に関する実践研究」の文部科学省指定を受けた。この研究には、学校の裁量権の拡大、地域との連携の2つの柱が設定されている。いわゆるコミュニティ・スクールの在り方を探っていく研究である。

この研究の柱の一つである「地域との連携」をはかるために、御所南小学校では、地域学校協議会(御所南コミュニティ)を設置した。御所南コミュニティは、単なる話し合いの会ではなく、学校と地域・保護者が一緒になって、子どもの学びを支えていこうとする、活動中心の会である。現在、58名の委員の方と30名あまりの教職員とで活動している。

この御所南コミュニティを通して、子どもたちの力を支え、伸ばしていこうとしている。

① 活動を中心とした御所南コミュニティの構成

御所南コミュニティは、12の小グループ(コミュニティ)に分かれて活動している。

この12のコミュニティは、これまで御所南小学校が総合的な学習で取り組んできたことや、今の子どもたちの課題から考えた。

それぞれのコミュニティは、地域や保護者の方4~7名と教職員とを合わせて、6~10名

で構成されている。定期的な会は月に1回程度実施しているが、それぞれのコミュニティ独自で会をもつことも多い。

御所南コミュニティでは、昨年度から、それぞれの部会ごとの年間計画を立ててきた。部会の性格により、事業を中心としたところや授業を中心としたところがあるが、年間計画の中に位置づけている。

- | | | |
|-------------|---------------|-----------|
| ・文化コミュニティ | ・国際コミュニティ | ・学びコミュニティ |
| ・福祉コミュニティ | ・ジュニアコミュニティ | ・表現コミュニティ |
| ・スポーツコミュニティ | ・コンピュータコミュニティ | ・健康コミュニティ |
| ・町づくりコミュニティ | ・図書館コミュニティ | ・環境コミュニティ |

② 御所南コミュニティによる学習支援

御所南コミュニティでは、さまざまな事業や授業を通して、子どもたちの学習を支え、伸ばしていくようにしている。

活動にあたって必要がある場合、コミュニティごとにボランティアを募集している。各コミュ

ニティは、このボランティアをコーディネートする仕事を行っている。

御所南コミュニティの活動を通して、これまでも増して幅広い人材が、学校教育にかかわってくださるようになった。また、多くの保護者が、学校教育の中で学習ボランティア活動をしてくださるようになってきている。

文化コミュニティ

地域にたくさんおられる伝統工芸に携わる方を、子どもたちが訪ねて歩くことができるように「職人さんマップ」をつくっている。

福祉コミュニティ

生活科や総合的な学習で取り組んできた「お年寄りとのふれあい」を進めている。福祉的なイベントへの参加も行っている。

スポーツコミュニティ

ウォーキング事業「レッツ・ウォーク」を企画して、低・中・高学年が、学校からそれぞれ違うコースに分かれて、自然活動しながら歩く活動を行った。

町づくりコミュニティ

地域にたくさん残る町家（木造住宅）を探検し、そのよさを見直すという活動をしている。見つける・比べる・探るなどの活動を通して、町家にくらす人とも関わっていくようにしている。

国際コミュニティ

インターナショナルスクールの子もたちとの交流や、英語を使つての絵画指導など、学習と結びついた国際理解や国際交流を進めている。

ジュニア・コミュニティ

地域の幼・小・中学校の連携を進めている。その中で、中学生のボランティアが生まれてくるようにしている。小中学校合同のたてわり地域清掃や、水泳学習交流などを行っている。

コンピュータ・コミュニティ

アラン・ケイ氏の提案によるスクイークを使った授業の支援を行っている。20名程のボランティアが、学習を支援している。休み時間のコンピュータ室解放も行う予定。

図書館コミュニティ

隔週土曜日の学校図書館開館には80名のボランティア、週2回の放課後開館には20名のボランティアを募り、子どもたちが本の楽しさを味わえるようにしている。

学びコミュニティ

各学年の学習内容に合うプロの方を招いて、プロの技に挑戦していく授業を行っている。お菓子づくりのプロ、サッカー選手、小説家、トリアスロン選手などをお呼びしている。

表現コミュニティ

子どもたちに、豊かな表現ができる力をつけようと考えている。プロの方を招いて、詩の朗読、日本舞踊、絵手紙、書道、華道などの活動を行っている。

健康コミュニティ

地域の健康づくり活動と学校の保健活動をつなげようと考えている。「体の健康」「心の健康」などのワークショップを実施している。

環境コミュニティ

環境問題について、大人も子どもと一緒に学ぶことを目指している。「御所南エコクラブ」を立ち上げ、「京都御苑のキノコ観察」などの活動を行っている。

Ⅵ 連動する学校評価

子どもたちにどのような力がついたのか、あるいはどのような点が不十分だったのか、ということを確認して、その後の教育活動に生かしていくことを、学校評価の基本としている。

そのために、子どもの自己評価、教員の自己評価、学校長の評価、保護者の評価、地域コミュニティの評価が連動して、子どもの教育活動に返っていくような計画を立てている。

① 児童の自己評価と教員の自己評価

児童の自己評価は、学ぶ力、基礎・基本となる力を調べられるように、項目設定した。それぞれの力を、質問形式で調査することにより、自分自身でどのような力がついているのかを振り返ることができるようにしている。

また、その項目に合わせて、子どもに力がつくような指導ができたか、という観点で教員も自己評価するようにしている。

これによって、子ども自身の評価と教師の評価のずれを見つけることができる。教師が高く自己評価している項目でも、子どもの自己評価が思わしくないような項目は、振り返りの後、重点的に指導していくが必要になる。

② 児童の自己評価と保護者の評価

児童の自己評価のうち、保護者に考えてもらいたい項目の調査結果を知らせ、保護者がどのように考えられるのかを調べるようにしている。

これによって、児童の力についての保護者の

考えがわかり、どのような指導が期待されているのかを知ることができる。その項目について、指導そのものを必要とされていないのか、学校での指導を期待されているのか、ということをつかんで、その結果を公表するようにする。

この結果をもとに、後期の指導や次年度の指導を見直すようにする。先の教師の自己評価と合わせると、どのような指導を行っていけばいいのかが見えてくる。

③ 保護者の評価とコミュニティの評価

児童の自己評価と、それに対する保護者の評価を御所南コミュニティに知らせ、その結果について考えていくことにする。

御所南コミュニティにおける評価活動は、質問形式をとるのではなく、コミュニティのメンバーと教職員との対話により、問題点を明らかにしていくワークショップ形式をとるようにした。

これによって、コミュニティごとの視点から子どもを見直すことになり、学校だけでは気づかない子どもの姿が浮かびあがってきた。

Ⅶ 調査を生かして

今回の調査結果は、これまでの取り組みの成果を示すものが多かった。これからは、この結果をもとにして、より意図的に取り組んでいけるようにしたい。

また、外部機関の評価と校内の評価を連動させることも考えていきたい。

① 「学びの基礎力」を高める

今回の調査結果から、「学びの基礎力」としては、平均的な数値を示すことがわかった。これまでの「学ぶ力」や「基礎・基本となる力」をつける取り組みを通して、現在の結果が出ているのだと考えられるが、今後、意図的に「学びの基礎力」を高めるような指導も必要かもしれない。

そのためには、学校行事も含めて、子どもたちにどのような力をつけていくのかという全体像を描くことが大切だと考える。

また、家庭・地域との連携を深めて、大きな集団で子どもたちの育ちを見守るような体制づくりが必要である。そのためにも、御所南コミュニティの取り組みを進めていきたい。

② 自己評価項目の設定

子どもにどのような力がついているのかを確かめるためには、校内の自己評価と今回のような外部機関の評価とが連動していくことが望ましい。

そこで、今回の調査項目を参考にしながら、校内の自己評価項目を考えていくようにしたい。学校の特色に応じた項目とともに、共通して調査する項目があれば、子どものようすがより明確にわかってくると考える。

③ 基礎・基本となる力(教科学力)の育成

基礎・基本となる力(調査では「教科学力」)を、

教職員の連携でつけることができているとわかったので、今後は、これまでの枠組みを見直し、どのようにすれば力がついてくるのかを明らかにしていきたい。

また、基礎的な内容を明らかにし、教えるべきことは徹底して教え、考えるべきことは徹底して考えるというようにしていきたい。

④ 学ぶ力(生きる力)の育成

学ぶ力(調査では「生きる力」)がついてきているということがわかってきたので、問題発見・解決的な学習過程をより明確にし、子どもたちが意識しながら学習を進めていくことができるようにしたい。

また、学ぶ力を教科の学習の中で意図的に使っていくことができるようにもしていきたい。

⑤ 力の関連を明らかに

調査の結果、それぞれの力が関連していることがわかったので、本校でも「学ぶ力」と「基礎・基本となる力」の関連を、より明確にしていくようにする。

「学ぶ力」と「基礎・基本となる力」は、両輪となっていくものだが、できるだけ、相互の因果関係がわかるようにしていきたい。

平成 15 年度 学校評価計画

